

開設１０周年記念誌発刊にあたり



おおむら里山村プレーパーク 世話人代表
みやちゃんこと 宮路 清正

2015 年 11 月、長崎県大村市の一角で「おおむら里山村プレーパーク」の活動を仲間と共に始めました。そして１０年間、長かったようで、短かったような気がします。

私は定年を数年後に控えた頃に、定年後にやりたいことを考えていた。私は、子どもの頃から外遊びが好きで、よく友達と遊びまわっていた。そんな私がやりたいと思ったのは、あの頃のように楽しかった遊びをもう一度できたら…というものだった。

そして、それができるプレーパークの場所探しを始めたが、簡単には見つからなかった。でも、子どもたちと外遊びをしたい気持ちは諦めなかった。

その頃に「森のようちえん」という活動を知り、とりあえず、子どもと外で遊ぶことができる、場所は自由、カリキュラムがなく自由に遊べる、ということで、「森のようちえん in おおむら」を立ち上げた。そこで、無我夢中で自分なりのやり方で子どもたちと森や川や畑などで遊んだ。子ども１０人位に囲まれて、それなりに楽しかった。

でも、保護者の方とのネットワークができた５年後の頃に、森のようちえんＯＢから「学校で木登りしたら怒られた」という話を聴いて、「大変だ、今すぐに、プレーパークを始める時だ」と思った。幸い、場所も知り合いの縁でできそうだったので交渉した。

条件的に「子どもが行きたい時に自由に行ける場所」ではなかったが、「その思いを忘れることなく、今できる事から始めよう」という思いで、森のようちえんの保護者達や、私のキャンプ仲間に私の気持ちを打ち明けてみると、多くの方が賛同してくれた。

あれから１０年、子どもたちだけでなく保護者の輪もひろがり、地域の方の理解も進んできたように思う。しかしながら、大村市だけでなく長崎県でも初めてのプレーパーク、分からないことも多く、多少の試練もあったが、多くの先輩に支えられ、ご指導をいただいた。東京からわざわざ現場に足を運んでもらった天野氏、毎年のように講演を引き受けてくれた福岡県の藤原氏など、多くの方が支え続けてくれたことに、感謝します。

まだ、理想通りのプレーパークではありませんが、ここに１０年間の記録をお届けします。我々の試みが近い将来、未来を支える大人になる夢を持ち続け、可能な限り遊び続けます。

ここまでの感謝と、今後もよろしくお願いしますの気持ちでこの記念誌を届けます。

おおむら里山村プレーパーク開設 10 周年記念誌発行に寄せて



NPO 法人おおむら里山村づくり委員会

理事長 加固 治男

このプレーパーク運営地がある遊休公有地（山林5万㎡）は、2012年6月長崎県から3年に亘る交渉の結果、大村地区地域活性化事業協議会の協力を得て公有地貸付契約が締結されました。

市民参加型共有地化の活動を環境保全団体（スナメリの森）の仲間10名程で始め、里山村の基盤整備を一部補助金・助成金の下、進める中で現おおむらプレーパーク世話人代表の宮路さんと出会うことができ、4年目の2015年11月プレーパークが開設されました。

今年度で本委員会は14年目を迎えましたがこの2015年は、色んな活動が動き出した年でした。ボランティアには九州電力長崎支店が参加、東屋を交流拠点に里山林、圃場整備のためのワークショップ開催によって会員は増え、更にプレーパークが加わったことで80名近くまでになり、プレーパークは本委員会の主要事業となりました。

焚火場周辺で子ども達が「野に放たれて」自由に遊び、親たちは「森の井戸端会議」さながら楽しげに休日を過ごす光景が月1回、里山村で繰り広げられています。

プレーパークがこの地に根付いていったのは、強いリーダーシップの下、受益者である子どもと保護者自らが活動主体であることです。本委員会の目標とする多世代の居場所づくりとしての里山塾のイベント開催と大きく異なるところです。そして、その底には今の子ども達が置かれている社会的環境の問題があるでしょう。

サル学者で児童文学作家の河合雅雄は今の子どものロボット化に警鐘を鳴らし、戸外に放ち森で群れで遊ばせなさい、と説く。また、詩人且つ児童文学者で伝道師の山村暮鳥（萩原朔太郎、室生犀星と同時代）は次の詩を残しています（「地を嗣ぐもの」から一部省略）。

みちばたであそんでゐた ひとりのこども どろを捏ねてゐた そのこども

そのどろで 山をこしらえ そこに木を植ゑ…

一ばん強く そして大きく こんどは自分を創ります

この記念誌が多くの人々に読まれることを願って止みません。そして、この里山村がプレーパークと共に次世代に継承されていくことを。